



# 骨相学的能力訓練の一場面：ウィリアムズ・セキュラー・スクールにおける教育実践をてがかりに

平野, 亮

---

**(Citation)**

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 5(2):95-104

**(Issue Date)**

2012-03

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCD0I)**

<https://doi.org/10.24546/81003908>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81003908>



## 骨相学的能力訓練の一場面

—ウィリアムズ・セキュラー・スクールにおける教育実践をてがかりに—

### One Scene of Phrenological Training of Faculties:

—Lessons and school life at Williams Secular School—

平野 亮\*  
Ryo HIRANO \*

**要約:** This article is a case study on phrenological education practiced at Williams Secular School (WSS) which phrenologist George Combe (1788-1858) founded in mid-nineteenth century. Then the education plan of the school described in *First Annual Report of the WSS* (1850) is analyzed from two points of view: (1) the education of phrenology as a subject; and (2) the education by phrenology as methodology.

The idea of education, an example of moral training, a scene of phrenology test characterized by Socratic questioning etc. documented in the *Report* tells us that the theory of phrenology made possible “training of all faculties” of students which was the aim of WSS. In this case, phrenology implied physiology of brain, Moral Science and the doctrine of faculties as good human nature. This example of WSS is informative for considering phrenological education.

### 1. はじめに

「学校の目標に含まれるのは、すべての能力、すなわち動物的能力、道徳的能力、宗教的能力、知的能力の訓練である」。これは、1850年に出版されたエディンバラ世俗学校の年次報告書の一節である。「労働者階級の子供たちに有益な世俗教育を提供する」目的で設立されたこの学校が掲げた教育目標、“あらゆる能力 (faculty) の訓練”には、ある原理が存在していた。19世紀西洋で大流行した新興科学、骨相学 (phrenology) である。

本稿は、教育の原理や方法論として19世紀に多くの教育言説を生み出した骨相学の教育論について、主に上記報告書の記述や紹介された教育実践を題材に検討し、その教育思想史的意義について考察することが目的である。ウィリアムズ・セキュラー・スクール (Williams' Secular School, 以下WSSと略す) と称したその学校は、骨相学者によって1848年に設立され、その教育の至る所に骨相学原則が働いていた。年次報告書には、そのような学校教育の理念や実践について記されており、骨相学が実際にどのように教育に応用されたのかを知る手がかりとなる。

本稿では、最初に骨相学について概説し、続いて関連先行研究を押さえる。次に、背景となる基礎的事項や歴史的な脈を整理しつつ、骨相学教育の珍しい実践事例を年次報告書から引き、分析・考察

する。その際、骨相学を教授科目とする教育と、骨相学を方法論あるいは原理とする教育という、2つの観点からWSSの骨相学的教育を検討する。最後に、能力論研究という観点を持ちつつ、以上を整理する。

### 2. 骨相学の基礎知識と先行研究の検討

骨相学とは、頭の凸凹や顔つきを観察ないし触察すれば、その人の気質や性格、知性や道徳性が分かる、と主張した19世紀の新興科学である。オリジナルは、18世紀末のドイツ人医師F・J・ガル (Franz Joseph Gall, 1758-1828) の考案した学説である。動物や人間の本能・性格・才能・気質・能力などは、有限個 (人間なら27個) の生得的な器官の生理の発現 (=機能) であり、それらの器官が集合して脳が形成される。言い換えれば、優しさや気性の荒さ、あるいは言葉や計算や音楽のセンスといったその人間各様の気質は、脳機能 (functions of the brain) によって説明される、というアイデアである。

先行研究に、ガルを「精神能力の脳皮質局在論のゴッドファーザー (godfather)」と表現するものがあるように<sup>1)</sup>、これは後のP・ブローカ (Paul Broca, 1824-1880) などにも影響を与えた脳機能局在論の先駆的学説と認められている。だが、ユニークなのは次だ。あ

\* 神戸大学大学院人間発達環境学研究所博士課程後期課程

(2011年9月30日 受付)  
(2012年1月16日 受理)

たかも筋肉の発達や力の発揮がその太さ・大きさと関わっているように、脳を構成する 27 個の器官も発達に応じて発揮される力に違いが出ると考えたガルは、器官の大小によって生じる脳の隆起や窪み、或いはそれが形状的に反映される頭蓋を診れば、その人間の気質や能力が分かる、と主張したのだ。現在では科学的に否定されているが、“頭を触ればその人が分かる”ことを保証したガルの理論は、賛否両論ありながらも、事実上 19 世紀の西洋世界を席卷したのであった。

このガル学説はふつう「骨相学」として知られている。だが、厳密には両者は異なる、とも言える。「骨相学」とは、助手の J・G・シュプリッツハイム (Johann Gaspar Spruzheim, 1776-1832) がガルとの離別の後に採用した名称で、原語は「フレノロジー (phrenology)」、ギリシャ語の「心 (phrēn)」と「論理 (logos)」から成る<sup>2</sup>。“頭のこぶ (bump) の学”という印象 (実際、当時しばしば嘲笑揶揄的となった) や日本語訳語の語感とは随分異なる“心の学”という含意、つまりサイコロジ (“魂=心の学”) とは別の“もう一つの心理学”という骨相学者たちのこの自己認識は興味深い。

ガルは「骨相学」という名称を嫌って用いなかったが、「骨相学」とは、端的に、シュプリッツハイムの手になる“使いやすいガル学説”であった。そこで具体的にシュプリッツハイムが行ったことは、心の能力の名称の整理およびその哲学的体系化 (階層化) である。ガルは、器官の名称には性格や行動を観察したままをつけ (例えば、窃盗の罪で収監されている囚人に共通する頭部の特徴的隆起が見つかれば、脳のその部分を「盗みの性向 (penchant au vol)」と名付けるような仕方) で、器官の順序についてはその場所、つまり脳のどの部分を構成するかのみを考慮し、それぞれの能力を並列的に扱った (解説の仕方にしても、ただ脳の基底部から頂点に向かって、というような位置関係に基づく順序しか意識されていなかった)<sup>3</sup>。

だが、各能力 (或いは器官) は「精神活動の自然」に従って区分、下位区分…と設けてゆくことが可能であると主張したシュプリッツハイムは、生物学で用いられる分類体系 (綱一目一属一種) を導入し、心の能力 (faculties of the mind) を「感情能力 (affective faculty)」と「知的能力 (intellectual faculty)」に分け、更に前者を「性向 (propensity)」と「情操 (sentiment)」に、後者を「五感 (external sense)」「知覚能力 (perceptive faculty)」「思慮能力 (reflective faculty)」に区分した。そして、各能力 (その数は、ガルの 27 個から 35+α 個にまで増えていたが) により形式性の強い抽象的命名を行い (例えば、「盗みの性向」の代わりに「所有」まで包含した「物欲性 (Acquisitiveness)」を採用)<sup>4</sup>、それらの最上位の類概念として「心 (Mind)」を設定した<sup>5</sup>。骨相学とは、ガルの「脳の生理学」が、言うなれば 19 世紀の能力心理学 (faculty psychology) として体系化 (哲学化) されたものなのである。

19 世紀に教育分野と強く結びついたのは、分類体系と用語体系を擁したこの「骨相学」である。「教育」は、理論の有効な応用の場としてガルの新説に関する最初の論文 (1798) から注目されていたが<sup>6</sup>、シュプリッツハイムやイギリスのジョージ・クーム (George Combe, 1788-1858: 「コーム」とも表記される) らによる後の教育理論ないし実践は、みな「骨相学」の体系に基づいて構想されたものだった。

従って、本稿の検討対象もまた骨相学である。

これまで、骨相学に関する教育史研究はいくつか発表されているが、中でもクームに関するものが多い。「イギリスの生んだ最も聡明で情熱的な教育家 (Educationist)」<sup>7</sup>とも称されるクームとその骨相学について、D・デ・ジュスティエーノ (1975)<sup>8</sup>と S・トムリンソン (2005)<sup>9</sup>は、イギリスとアメリカの教育史における、明るみには論じられないその功績と意義の大きさを検証した。また、今日的な世俗教育や科学 (的) 教育カリキュラムの源流に、クームと骨相学を位置づける論攷も提出されている (A・C・グラント<sup>10</sup>, A・プライス<sup>11</sup>, D・ホドソン&R・B・プロフェット<sup>12</sup>など)。日本でも、小松佳代子 (1998)<sup>13</sup>が、史料の丹念な読解から、クームの骨相学的教育論を整理・分析している。

これに対し、本稿は、教育改革の面を強調するやや社会制度史的色彩の濃い上記先行研究とは異なる、教育思想あるいは認識論的な視角から、骨相学を検討する試みの一作業である。殊に、関心は骨相学の「能力 (faculty)」論に向けられる。人間本性 (human nature) 論である能力心理学としての骨相学が唱道した教育論とは何であったか。それを知る一つの手がかりとして、クームが運営したエディンバラ世俗学校の報告書から、骨相学的教育論の実践例などを引いて分析、考察する。

### 3. 『WSS 第一年次報告書』(1850) について

まず、史料に関する事柄について解説しておこう。報告書を出版したエディンバラ世俗学校、或いはウィリアムズ・セキュラー・スクール (WSS) は、骨相学者のクームが、1848 年 12 月に友人の J・シンプソン (James Simpson, 1781-1853)<sup>14</sup>とともに設立した私立学校である。学校のモデルは、功利主義者 W・エリス (William Ellis, 1800-1881) が労働者階級の子供に教育を与える目的で設立したパークベック・スクール (Birkbeck School) であり<sup>15</sup>、他方クームが学校運営に直接乗り出す動機付けの一つとなったのは、クームの理論に影響を受けて展開されていたホレース・マン (Horace Mann, 1796-1859) によるマサチューセッツでの教育実践であった<sup>16</sup>。クームは、骨相学の理論に多分に基づいた教育実践を展開したが、経営難などから、開校より 6 年目の 1854 年に、WSS は敢えなく廃校となった。

報告書は、1850 年から廃校になる 1854 年までの 5 年分が出版されている。本稿で検討するのは、今回入手することのできたその第一年次報告書 (1850) である。『ウィリアムズ・セキュラー・スクール第一年次報告書 (First annual report of the Williams Secular School)』(以下『報告書』と略記。なお、参照箇所は頁数は、本文中 (p.ー) で示した)<sup>17</sup>は、当時 1 ペニーで市販された 20 頁の小冊子で、内容は前半の 13 頁が報告書部分、残りは附録 (Appendix) として、2 件の『スコツマン (Scotsman)』(新聞) 記事 (pp.14-18) と初年度の会計報告 (pp.19-20) が付いている。表紙には、クームと親交のあったアルバート公 (Prince Albert, 1819-1861)<sup>18</sup>による、神と科学を賛美する演説が引用されている。なお、附録の新聞記事は、「本校は、いつでも訪問者に対して門を開いてきました」(p.13) という『報告書』の言葉通り、1849 年に 2 回、生徒の期末試験が公開された際に書かれたものである (その折には、新聞記者のほかにも、生徒の親や友人が WSS を訪れ、試験の様態を参観した)<sup>19</sup>。

#### 4. WSS の教育理念と学校概要

WSS の創立者であるクームは、イギリス最大の骨相学者にして社会改良家、教育家、またしばしば『人間構成論』の著者と称される人物である<sup>20</sup>。彼の主著『人間構成論 (*The constitution of man*)』(初版 1828) は、骨相学の生理学的な心の構成 (=35+ $\alpha$  個の能力とその体系) の理論を基礎に、人間の従うべき自然法則 (Natural laws) とその関係性等について論じた、ヴィクトリア時代の大ベストセラーだが<sup>21</sup>、実はクーム自身はこの著作を「ある意味、教育に関する試論の序章」と位置づけていた<sup>22</sup>。そして事実上、クームの骨相学は、マンやエリスの他、S・ウィルダースピン (Samuel Wilderspin, 1792-1866)<sup>23</sup> や W・ラヴェット (William Lovett, 1800-1877)<sup>24</sup>、また急進派 (radicals) = 中産階級出身者らによる教育改革運動に、理論的支柱を与えたのだった。

クームの教育理論を詳細に検討する余裕はないが<sup>25</sup>、冒頭の「すべての能力、すなわち動物的能力 [感覚や運動に関わる能力]、道徳的能力、宗教的能力、知的能力の訓練」(p.3: 但し [ ] 内は引用者補足。以下同) が、その簡潔な要約である。尤も、これはクームに限らない、骨相学的教育の基本である。人間の本性である能力、即ち人間構成を知り、鍛えれば、人は神の法則や全体計画 (general scheme) の中で善く生きていくことができる。「労働者階級<sup>26</sup>の子供たちに有益な世俗教育 (secular education) <sup>27</sup> を提供する」(p.3) WSS においても、そのような理念と前提の上に教育が計画されたのである。

では、ここで WSS の概要を押さえておこう (pp.3-9)。男子校としてスタートした WSS は、2 年目から共学化し、生徒の三分の一が女子となった (一部を除き男女は共に授業を受けたが、そのために当初は男子が浮ついて、授業がままならないといった事態も起きた)。なお、その後閉校までの 6 年間の平均出席者数は、150 人余であったという<sup>28</sup>。児童生徒の年齢は明記されていないが、下は 5, 6 歳 (five or six) から、上は中等教育段階の子供までいたようである<sup>29</sup>。授業時間は、正午に休憩をはさみ、午前 9 時から午後 3 時までだった。学費は、一人につき一学期 (quarter) 4 シリングが徴収された<sup>30</sup>。

教員は、校長のウィリアム・M・ウィリアムズ (William Mattieu Williams, 1820-1892) と女性の補助教員カーマイケル (Miss Carmichael) の二人の名前が見える (クームやシンプソンもたまたま教壇に立った)。ウィリアムズはロンドン職工学院 (Mechanics' Institute)<sup>31</sup> を卒業した化学者で、エリスのパークベック・スクール設立を助けたイギリス世俗教育の功労者でもある<sup>32</sup>。クームを尊敬しており、学生時代に勉強した骨相学が、ウィリアムズのライフワークだったようだ<sup>33</sup>。

教えられた科目は、英語 (English)<sup>34</sup> のリーディング・文法・作文・書き方、算術、地理、歴史、簿記、描画、音楽。さらに数学、自然誌 (Natural History)、化学、自然哲学 (Natural Philosophy)、社会経済学 (Social Economy)、生理学そして骨相学、それぞれの基礎。女子生徒のための裁縫の基本と応用、である (自然誌および自然哲学は、いわゆる物理学、天文学、生物学、博物学等のことである) (p.4)。また、教科としてはではないが、身体トレーニングも重視されており、授業と授業の合間には、健康のための健康体操

(calisthenic exercise) が実践された (p.8)。

教授システムは、「排他的な熱烈な支持者にありがちなようにいずれか一方を排除するということはせず」、モニトリアル・システムと一斉授業 (simultaneous system) のいいとこ取りが目指された。前者に関しては、助教 (monitor) 一人につき 9, 10 人程度 (助教の統制力を考慮して、上限は 12 人) を一クラスとし、成績などを加味した「実用的なクラス分け」を行った (p.4)<sup>35</sup>。

授業方法は、パークベック・スクールに倣ったソクラテス式問答法 (Socratic questioning) と実物教育 (Object-lessons) が特徴的だった。ソクラテス式問答法は、教師の質問に生徒が答えながら進められる、西洋に伝統的な対話式教育法である<sup>36</sup>。実物教育は、文字や書物でなく実物を通じて学習させる教育法で、起源は民衆教育の父ペスタロッチー (Johann Heinrich Pestalozzi, 1746-1827) や、時にコメニウス (Johann Amos Comenius, 1592-1670) にまで遡られる。これは上級クラスでの「科学教育」の基礎という位置づけから、「小さな子供たちに毎日行われ」た。いずれも、受動的かつ服従的な従来の学校教育や機械的な学習 (learn by route) への批判に根差している (他に、生徒が身の回りの疑問を用紙に記入して提出し、授業の中で教師がそれに答える、という取り組みも、同じく、子供の自主性や主体性を培うための実践の一事例である (p.8))。尚、公開された試験もこの両方式で実施されている。

当時の一般的学校教育への反発の例として、体罰 (corporal punishment) についても触れておこう<sup>37</sup>。「体罰やその他厳しい措置に訴えることなく秩序と規律を維持すること」は、教師の経験した第一の困難だった。結局、「家と以前通っていた学校の両方で厳しい躰けに慣れてしまった子供たちが、体罰への恐怖心だけが自製の根拠となるような訓練を受け、そのために相当程度で他の動因 (motive) に対して無感覚になってしまっている」という事態の対応に追われ、時に体罰に訴えてしまったというが、「この最も不愉快な躰けの手段」を放棄するのが、本当は望ましいと述べられている<sup>38</sup>。

#### 5. WSS における骨相学的教育

次は、『報告書』に記された WSS の教育実践例を見、骨相学の教育論について検討する。はじめに、考察の準備として、“骨相学の教育”を次の 2 通り、即ち骨相学そのものについての教授と学習 (つまり科目としての骨相学)、それと、骨相学の理論に基づく教育 (つまり原理、方法論としての骨相学) に区別しよう。換言すると、一つは“骨相学を教育する”，もう一つは“骨相学で教育する”ということである。以下、それぞれの例を見てゆこう。

まず、教科としての骨相学についてである。骨相学教授においても、最初は実物教育が行われる (p.6)。骨相学の理論は、脳と神経系それに頭蓋に関する学、即ち生理学と解剖学からなっているため、最初は「一本の骨や頭蓋骨、全身骨格、解剖図、解剖標本」などが「実物」として、低学年の子供たちの目の前に並べられた。それに合わせて、「或る物が茶色だとか、固いとか、ニオイがするといったことを自分たちはどのようにして分かるんだろう？」という問いを、生徒が自分自身で立てられるように仕向けてやり、自分たちの感覚や知覚能力の機能と器官を、子供たちに親しませる。こうして得られる精神能力 (mental faculties) の初歩的概念が、骨相学の入門で

あった。

ところで、この実物教育は「生理学と道徳科学 (Moral Science) の入門編」としても計画されていた (p.6)。この点に関して補足しておこう。当時のイギリス社会は、18世紀以来の技術革新と生産形態の変化(産業革命)から、多くの労働者が都市に流入し工場労働などに従事していた。何の基盤も持たない根無し草の「自由な労働者」<sup>39)</sup>は、従来の都市民からは「危険な階級」と見なされ、その道徳性がしばしば問題とされていた<sup>40)</sup>。イギリスにおいて長く議論されてきた下層階級の教育問題も<sup>41)</sup>、この時代に改めて、焦点の一つが彼らの宗教的退廃や道徳的退行に、したたかに結ばれたのである。

WSSの教育は、常に道徳教育が念頭に置かれていた<sup>42)</sup>。骨相学の授業も然りである。それは、ガルやシュプルツハイムにおいても当然重視されていた“理性的動物 (animal rationale)”の自然=生得的な心の能力に由来する「道徳性 (moral quality)」が、社会改良家だったクームによって、より強勢が加えられたものであった<sup>43)</sup>。そして、「道徳訓練 (moral training) はいつも学校の最重要目的であった」(p.9)というクーム自身に教育理論を与えたのは、やはり骨相学だった。つまり、クームの言う「生理学や道徳科学」はいつでも骨相学と通底していたのである<sup>44)</sup>。

この様相は、WSSにおいて当然のように信仰・宗教(キリスト教)と密接に関連づけられて展開された。子供たちの骨相学学習は、「自分たちの身体器官と心器官の構造や関係、更には観察される精神現象から演繹された、自分たちの身体的・知的・道徳的構成の法則について教わっている」(p.9)という意味合いで企図されていた。「法則」とは、言うまでもなく「神/創造主」に根拠を持つ。ただし、あらゆるセクト主義教育の排除を目指すセキュラー・スクール(世俗学校)において、それはより原理的に聖書や「自然」において語られたという点は重要である<sup>45)</sup>。

『報告書』では、しつこいまでに「人は神の道具 (Divine instrument) である」や「科学の教えるあらゆる真理は、神意の顕現 [啓示] である」といった意味合いの命題が繰り返されている。この背景には、労働者に関わる問題という上述の事情の他に、クームが、そして骨相学そのものが、常に無神論 (atheism) やキリスト教不信 (scepticism) の誹り・批判に晒されていたということもあるだろう。ガルやシュプルツハイムは勿論、骨相学の理論を説く者はいつでも、「神」と「信仰」に対して弁明をせねばならなかった。しかもその上、実際にクームは、自然神学 (natural theology) を神の摂理を明らかにしてくれる体系として信奉していたという<sup>46)</sup>。晩年、ホレーズ・マンとの行き違いの原因にもなったクームの、或いは骨相学の自然神学的キリスト教が、WSSにおいても展開されていたのである<sup>47)</sup>。

骨相学の学びは、以上の次第から、『報告書』において次のように意義付けられた。「創造的知性 [神] が物理世界を支配し維持しているということを、物理 [身体] 科学 (Physical Sciences) の講義で学び、神が器官を有する生物 (organized beings) に認めた生命と健康を享受する条件を、生理学で学ぶ。そして骨相学の講義で、…知的能力と感情能力の発現の器官的条件に関する説明を発見し、道徳世界が物理世界同様、固定的かつ決定的な構成で創造されているということを知り、私たちが研究できる法則を見つけ、それによ

って私たちの道徳的行為に関わる創造主の意志の大部分を知るのである」(p.9)。

このような骨相学教育の成果を、私たちは、1849年7月27日に実施されたWSSの試験の記事から、“評価”してみることができる。

「脳と神経系の構造と機能、即ち骨相学」の試験は、上級生 (senior division) を対象に問答式で行われ、クームやシンプソンも出題者として参加した。まず、何の標もない頭蓋骨が生徒の前に置かれ、クームがランダムに頭蓋骨の部位に触れると、生徒はその部分のちようど真下にくる脳器官と神経の名前を答え、能力の適切な効用 [機能] と誤った効用 (uses and abuses) について説明する。これを対話によって繰り返していく形で、試験は行われた (pp.17-18)。

図1 (左)  
頭蓋骨を指差す骨相学者<sup>48)</sup>  
(1839)



図2 (右)  
骨相学胸像<sup>49)</sup>  
(1821)

問：[頭蓋骨上の或る部分を指しながら] ここには何の器官があるのか? — 答：(尊信 (Veneration)) です

問：その効用は? — 答：尊敬や崇拜の情動、宗教的な感情を生み出します

問：誤った効用は? — 答：偶像崇拜や迷信に傾き、尊敬するに値しない物や人を崇拜するようになります

問：宗教的感情に関わる能力で、他のものはあるか? — 答：(希望 (Hope)) と (驚嘆 (Wonder)) の器官があります

問：もし誰かに、宗教なんてナンセンスだよ、坊主 (priest) が人を秩序よくするために発明したものさ、と言われたら、君は何と答える? — 答：脳には宗教に関する器官が存在している。器官をお創りになったのは神です。神は、人間を宗教的存在 (religious being) にお創りになったのです、と答えます

問：古代ギリシャやローマの人々は偶像を崇拜したが、彼らは宗教的だったのかな? — 答：はい。でも、迷信的でした。誤った宗教だったのです

問：真実の宗教を見つけるにはどうしたらいい? — 答：僕たちの知的能力と道徳的能力を、神の意志を研究することに使えばいいと思います

問：この器官は何? — 答：(理想 (Ideality)) 器官です

問：その効用は? — 答：美しく洗練されたものへの愛情です

問：(理想) の器官を喜ばせるような物は何かあるかな? — 答：ウォルター・スコット卿 (Sir Walter Scott) の記念塔、ステewart氏 (Mr. Stewart) の記念碑、カルトン・ヒル (Calton Hill) の上にある塔、市中銀行 (Commercial Bank) の正面、プリンセス通り公園 (Princes' Street Gardens)、アーサーズ・シート (Arthur's Seat) からの眺めなどです (一つ一つは、別の子供から出された答

えである)

問：他の能力で、(理想)のような享受 (enjoyment) のための能力はあるか？ — 答：〈色彩 (Colouring)〉と〈諧謔 (Wit)〉、〈時間 (Time)〉と〈音調 (Tune)〉です

問：その能力は、人間が折に触れて陽気に幸せになるようにとの神の意図を明らかにしているの？ — 答：はい

問：或る人たちはウイスキーを飲むが、それは何のため？ — 答：幸せになるためです

問：他にも幸せを感じる方法はあるかな？ — 答：はい。適度な量の食事を摂ること、肌を清潔にすること、きれいな空気で呼吸をすること、運動すること、役に立つ仕事に従事すること、知識を獲得することなどで

問：幸せになる2つの方法、つまりウイスキーを飲むという方法与今言ってくれたような方法と、いずれが優れているだろうか？ —

— 答：僕たちの答えの方法の方が優れています

問：ウイスキーを飲むと胃はどうなるだろうか？ — 答：炎症などを起こします

問：脳にとってはどう？ — 答：やはり炎症を引き起こし、馬鹿にしてしまいます

問：では、もう一方の方法だとどうなるんだい？ — 答：胃と脳をよくしてくれます

問：ウイスキーを飲んでしまうと、次の日その人はどうなるか？ — 答：呆として、調子が悪く、仕事に取り組むことができません

問：では、もう一方の方法では？ — 答：力がみなぎって調子もよく、やらなければならないことに、何でも元気よく取り組みます

以上が試験的一幕である。骨相学に関する知識を確認する試験において、教師たちは、主に宗教と道徳をテーマに問うことで、骨相学教育の成果を測ろうとした。それに対し、生徒たちは解答によって彼らの宗教的・道徳的思考や論理がしっかりと骨相学に基づいて構成されていることを示した。より善く幸せに生きるための骨相学の知識が、こうして生徒たちの中に蓄積されてゆくという寸法である。

当初、多くの疑問の声が上がったという骨相学の授業科目導入の理由を、『報告書』は、やはり宗教的意図において説明した (p.9)。教育の第一の原理に常に神が置かれ、それがクームによって都度表明されていることに関しては先に述べた通りだが、面白いのは、何にしても骨相学の知識なくしては始まらない、と主張された点である。「彼ら自身の身体の構成と心の構成について教えないければ、他の被造物や創造主との関係についての、明快にして有用で実用的な概念を子供たちに伝えることは不可能である」。子供が、自分たちの精神能力と身体機能 (bodily functions) について理解して、初めて宗教的かつ道徳的な生が可能になるとクームは言う。これは即ち、WSS において、骨相学を教育することが他のあらゆる教科にもまして重要であったことを意味しているのである。

それでは次に、もう一方の“骨相学に基づく教育”について見てみよう。骨相学で教育するとは何か。簡約すれば、それは生理学としての骨相学、道徳科学としての骨相学、或いは“能力心理学とし

ての骨相学”を理論根拠として計画・説明される、能力の教育である。道徳性や知性は人間に本性的な自然であり、それは脳という解剖学的器官の生理として実現する、という骨相学の理論に基づき、上述の骨相学ほか各科目における知識教授 (instruction) とは別の教育が構想される。それは、本稿冒頭に引いた WSS の学校目標に示される、「すべての能力、すなわち動物的能力、道徳的能力、宗教的能力、知的能力の訓練 (training)」である。

骨相学を根拠に、或いは説明原理として実施される教育実践として、『報告書』では「道徳トレーニング (moral training)」と「身体トレーニング (physical training)」が言及されている。身体トレーニングについては、上述の、「元氣と陽気を維持するために」授業合間に実施された「健康体操 (calisthenic exercise)」の名前が挙がっているばかりで、内容や形態などの詳細は明らかでない。だが、骨相学の教育論において、身体ないし健康は、能力の条件という観点から常に重視されており<sup>50</sup>、「幸せ」について尋ねた試験での問答 (上記) から分かる通り、環境や衛生や食などととも、骨相学で教育する際の、一つの大きな関心事・論点であったことは指摘しておこう<sup>51</sup>。

道徳トレーニングに関しては、面白い実践が『報告書』に紹介されている。それは、生徒によって構成される陪審団の「審理 (trial)」である (p.10)。校内で、生徒間で、窃盗や喧嘩などの道徳的非行 (moral delinquencies) が起こった場合、WSS では生徒を陪審員に、教員を裁判官にした裁判が開かれる<sup>52</sup>。この実践は、子供たちのための「実践的な道徳授業 (practical moral lesson)」という意図で行われる道徳教育であり、その目的は「道徳の力 (moral powers) を発揮させ、発達させてやる (develop) こと」だったと明言されている。

一方では、「[犯した罪のために] 学友から有罪判決を受けることになる違反者は、教師から宣告を受けるよりも、遙かに深くその判決の持つ力と正義を感じ、他方では、「正義の至上性を主張する陪審員の子供たちは、自分たちの道徳力 (moral powers) を働かせており、それによって自分たちが同じ違反を犯してしまう危険性に対して、備えを行っているのである」(p.10)。このように双方が「道徳力」——恐らく、特に〈正義感 (Conscientiousness)〉や〈仁愛 (Benevolence)〉などの器官に由来する——を活動させることが、一つの能力訓練だったのである。

## 6. 考察——骨相学的教育実践の特徴

では、上で2通りに見た WSS の教育実践について、総括的に考察してみよう。まずは全体的特徴として、WSS の教育が、

“エデュケーション教育は「インストラクション知識の教授」と「トレーニング能力の訓練」の2要件から成る”とするクームの教育論を具現化するべく<sup>53</sup>、教授と訓練の2つの相によって計画・実施されていたことが、『報告書』から分かる。様々な教科と並んで開講された骨相学においては、骨相学の知識が教授され、他方では骨相学の理論に基づいて、健康体操や「審理」実践などの心身トレーニングが実行された。これが、骨相学を教育し、骨相学で教育する、WSS の学校教育である。

試験でのやりとりからは、道徳科学であり生理学である骨相学の、

「を」と「で」の教育を見てとることができる。教師からは、「真実の宗教」と「誤った宗教」についての問題や、飲酒を誡めたり、衛生や健康への配慮を促す「道徳」に関する問題が出題される<sup>54</sup>。すると、恰も快苦の二元論的発想に対応するかのような、能力の効用と誤用という形式の問いに、当然の如く、生理学的な解答が、子供たちからは出されるのだ。例えば、宗教は聖職者のまやかしか、という問いに「脳の器官」を根拠に解答したり、ウイスキーの悪徳について脳や胃の「炎症」を以て答える論理などは、非常に興味深い<sup>55</sup>。骨相学の知識のアウトプットは、生活における骨相学的＝科学的な道徳律を再確認する、という狙いもあったのであろう。

一方、「審理」の実践からは、次のことが指摘できる。しばしば、骨相学の特徴として、それが個別性・個体差の理論だということが指摘される<sup>56</sup>。発達程度の異なる30数個の器官の組み合わせによって、無限の個性を産生する骨相学<sup>57</sup>においては、教育に関しても、「全ての子供が同じ内容の教育を受けねばならないのは、大いなる誤りである」と言明されていた<sup>58</sup>。しかし、だからといって個別教育が、いつでも骨相学的教育の唯一の理想的方法論というのではない。上で見たように、自分の身の回りの例、経験、実物などを重視するWSSでは、道徳性の器官を働かせるための一つの方略として、「審理」を実施した。このような、社会的文脈あつての道徳的能力の訓練には、小松(1998)も分析するように、人は一カ所に集められねばならず、「集団的な場である「学校」がむしろ必要とされたのである<sup>59</sup>。

この他に、注目すべきは「効用と誤用 (uses and abuses)」である。これは、試験問題の中心的論点であり、いずれの骨相学の教育においても眼目となっている概念装置だが、生理学的に換言すれば、「脳(器官)機能」である。よい機能と悪い機能、或いは正しい機能と誤った機能という考えは、「すべての能力はそれ自体はよいものだが、すべて誤用される危険性がある」という哲学的信念に依っている。小松が、クーム教育論において「まず何よりも重要」<sup>60</sup>とした、人間の本性を善と見るこのアイデアは、元々はシュブルツハイムによる骨相学の哲学に由来する。

シュブルツハイムは「[人間に]悪徳の性向を認める」ガルを非難し、被造物の“自然”としての“完全な道徳”という論理のために、「能力 (facultés) はそれ自体よいものである」と主張した<sup>61</sup>。能力が正しく働けば、それはいつでも道徳的で神意に適った帰結へと至るといふのだ(先の例で言うと、ガルが「盗みの性向」と見た能力は、(物欲性)の誤った機能＝誤用、ということである)。このような骨相学の哲学が、教育の理論と実践の構築にとって好都合であったことは相違ない。WSSの実践は、つまり、“クームの実践例”というばかりでなく、道徳や宗教に置かれた力点の強度のアピールなど時代的・地域的な傾向も含めて、その特徴がよく顕われた“骨相学的教育の実践例”とすることができるのである。

最後に、『報告書』の記述の特徴についても、改めて論じておこう。それは、骨相学で教育するWSSにおいては、教育の思考、或いは言説が、骨相学の理論とタームを用いて構成された、という点である。例えば、「審理」実践では、喧嘩や窃盗などの学校荒廃とそれに応じた教育が、「道徳力」の「発達」という次元において思考され、語られた(p.10)。これは、道徳を人間の生得的能力に依るとする、

骨相学の理論に基づく思考と語彙の選択である。また同様の例として、子供の自主性を活かすための教師の工夫を述べた箇所では、その効果を、「[子供たちの]知的能力が活発に働き、発達し、教えられた主題がしっかりと心(mind)に定着する」と表現している(p.5)。

より直接的な例は、試験の問答である。そこでは、宗教や神から、愛情や喜びなどの感情・情念、幸せ、健康・食事・衛生・空気・運動、職業等々が、全て「能力」と、或いはその物理的条件である「脳」との関連で理解され、議論されており、骨相学的記述の特徴を洞察するに十分である。骨相学は、生理的な/生得的な「能力」を要に、「道徳」や「知性」、「心」や「脳」に関する(科学的)諸概念のセット(語彙)を、「教育」に関する思惟・言説に提供したのである。

## 7. おわりに

本稿では、『WSS 第一年次報告書』(1850)を繙き、骨相学者クームウィリアムズ・セキュラー・スクールの設立した世俗学校 W S S において実践された、骨相学を主題ないし原理とする教育実践の事例を取り上げ検討した。信仰や「道徳」(健康や衛生も含まれた)において焦点化され、問題視されていた当時の労働者階級の子弟を対象に、“全ての能力の訓練 (training of all the faculties)”を目標にして仕組まれたWSSの教育は、「脳の生理学」であると同時に「道徳科学」、即ち人間本性＝自然としての善なる「能力」の理論(cf.性善説)、骨相学に依拠することで可能となる教育であったことは、以上の論考の通りである。

骨相学の授業では、「心の構成」または脳を形成する個々の生理学的器官の機能、即ち能力についての知識を得、その正しい使途(効用)を、体験的な心身のトレーニングで練習する。「教育は、間違いなく、如何なる新しい能力をも生み出すことはできない。教育の役割は、ただそれぞれの能力を活性化し、働かせ、導き、その効用[正しい機能]を判定して、誤用を防ぐことである」<sup>62</sup>という骨相学の教育理論が、WSSでは骨相学を教育し、骨相学で教育する実践として具現化されていたのである。

本研究は、骨相学の教育史において、骨相学がどのように教育に応用されたのかを観察する、一つの事例を与えてくれる。それは即ち、能力概念の思想史研究にとっては、近代において最大の能力(ファカルティ)論だった骨相学が、教育と如何にして結びつき、どのように具体化され、実践されたのかを知る一材料である。教育を考察しようとするならば、いずれにしろ「能力」について検討しなければ仕方がない<sup>63</sup>。能力心理学としての骨相学の能力教育論の研究は、その考察に歴史からの重要な示唆を提示するのであり、本稿はその一助をなすものである。

## 註

<sup>1</sup> Owsei Temkin, “Gall and the phrenological movement,” *Bulletin of the history of medicine*, vol.21, no.3, 1947, p.275

<sup>2</sup> 「phrēn [プレーン]」とは、元々「横隔膜」のことだが、古代ギリシャでは思考の座とも考えられた。その他、骨相学の名称については、平野亮「F・J・ガルの学説に見る骨相学の間人観—骨相学の

教育史研究のための基礎的研究『神戸大学大学院人間発達環境学研究所研究紀要』第4巻, 第1号, 2010年, 39-40頁を参照。

<sup>3</sup> J. G. Spurzheim, *Phrenology, or the doctrine of the mental phenomena*, vol.1, 3rd American ed., Boston: Marsh, Capen and Lyon, 1834, pp.124-136 :

但し, ガルが認めた器官の解剖学的位置(脳のどの部分か)に関しては, 名称の変更はあっても, 以後の骨相学においても殆ど変化しない。また, 逆にガルにおいても, 「観察」の自然の結果としての「動物と人間に共通な能力」, のような区分は存在した。

<sup>4</sup> 骨相学者の能力項目については, 小松佳代子「骨相学と教育—G. Combe の教育論を中心に」(『大人と子供の関係史』第三論集, 大人と子供の関係史研究会, 1998年, 76頁)にG・クーム(本文後述)のものが載っているので参照されたい。

<sup>5</sup> J. G. Spurzheim, *The physiognomical system of Drs. Gall and Spurzheim*, 2nd ed., London: Baldwin, Cradock and Joy, 1815, p.276

<sup>6</sup> François Joseph Gall, “Letter from Dr. F. J. Gall, to Joseph Fr. De Retzer, upon the functions of the brain, in man and animals,” trans. by Winslow Lewis, Jr., *On the origin of the moral qualities and intellectual faculties of man*, Boston: Marsh, Capen & Lyon, 1835, p.7 :

因みに, バリでの講義の中でガルは, 決定論の批判に反論し, 「私が教育の第一の擁護者だ」という言葉を残している(Martin Staum, “Physiognomy and phrenology at the Paris Athénée,” *Journal of the history of ideas*, vol.56, no.3, 1995, p.453)。

<sup>7</sup> William Jolly ed., *Education: its principles and practice, as developed by George Combe, author of “The constitution of man,”* London: Macmillan and co., 1879, p.v

<sup>8</sup> David de Giustino, *Conquest of mind*, London: Croom Helm, 1975

<sup>9</sup> Stephen Tomlinson, *Head masters: phrenology, secular education, and nineteenth-century social thought*, Alabama: The University of Alabama Press, 2005

<sup>10</sup> A. Cameron Grant, “A note on ‘Secular’ education in the nineteenth century,” *British journal of education studies*, vol.16, no.3, 1968, pp.308-317

<sup>11</sup> Alan Price, “A pioneer of scientific education: George Combe (1788-1858),” *Educational review*, vol.12, no.3, 1960, pp.219-229

<sup>12</sup> D. Hodson & R. B. Prophet, “The influence of phrenological theory on the science curriculum in Victorian England,” *International journal of science education*, vol.5, issue 3, 1983, pp.263-274

<sup>13</sup> 小松佳代子, 前掲論文(前註4), 71-87頁

<sup>14</sup> ジェームズ・シンプソンは, スコットランドの教育(運動)家。エディンバラ骨相学会(Phrenological Society)および骨相学協会(Phrenological Association)の会員で, 骨相学と教育についての講義を各地で開講した。彼の著『民衆教育の必要性(Necessity of popular education)』(1834)は, アメリカ公教育の父ホレーズ・マンの教育観に決定的な影響を与えた一冊であったという。

<sup>15</sup> バークベック・スクールは, 職工学院(後註31)の創立者ジョージ・バークベック(George Birkebeck, 1776-1841)の名を冠して, 1848年7月にロンドンに第一校が開設された。バークベック・スクールの目的の一つは, 創設者のエリスが, 彼の「社会経済学」を労働者階級の子弟に講じることであった。その他詳細は, 岡田与好『自由経済の思想』東京大学出版会, 1979年, を参照。

<sup>16</sup> マンは, クームとその科学的人間本性論=骨相学に基づく教育論の熱烈な信奉者で, 息子の名前を「ジョージ・クーム・マン(George Combe Mann)」にしたほどであった。マンと骨相学に関しては, 前出トムリンソンの研究(前註9)のほか, D・W・ポールソン(Dwight W. Paulson)による博士論文(dissertation), “Phrenology, Horace Mann and educational reform” (University of Washington, 1993)

などの成果も提出されている。

<sup>17</sup> [W. Mattieu Williams, George Combe & James Simpson], *First annual report of the Williams Secular School*, Edinburgh: Macmillan and Stewart, 1850, pp.1-20

<sup>18</sup> 骨相学や統計学など当時新興の科学に対して好奇心旺盛で, 1851年のロンドン万国博覧会では旗振り役も務めた, ヴィクトリア女王(Queen Victoria, 1819-1901)の夫アルバート公は, クームをバッキンガム宮殿に招き, 子供たちの骨相を診断させた。クームの自伝には, アルバート公からの感謝が綴られた私信(1851)の言葉が転載されている(Charles Gibbon, *The life of George Combe: author of “The constitution of man,”* vol.2, London: Macmillan and co., 1878, p.299)。そのほか, David Stack, *Queen Victoria’s skull: George Combe and the mid-Victorian mind*, London: habledon continuum, 2008, pp.175-190も参照。

<sup>19</sup> ところで, この『報告書』の内容が日本語で紹介されるのは本稿が初めてではない。重要な先行研究である前掲, 小松(1998)の研究に冒頭部分が引用されているほか, 上宮正一郎は経済学教育史の観点から, 「エリス式経済学教育」の展開の一事例としてWSSを取り上げ, 社会経済学に関する記述を『報告書』から引いている(上宮正一郎「エリス式経済学教育について」『國民経済雑誌』第177巻, 第4号, 1998年, 17-36頁)。惜しむらくは, 『報告書』に紹介された骨相学の試験の様や, 「道徳力」のトレーニングなどに触れられていないことであろう。なお, 小松と上宮が参照したのは, クームの教育関連史料を整理解説を加えた約800頁の大著, W・ジョリー編『教育』(前註7)に記載された, 5年分の報告書の抜粋である。『教育』には, この年次報告書の抜粋+解説(pp.680-710)の他, WSSの設立趣意書や会議録等の抜粋+解説(pp.201-218)も記述されている。

<sup>20</sup> ジョージ・クームは, エディンバラのビール職人の家の生まれ。事務弁護士の見習いをしていた頃に骨相学を知り, 最初は批判的だったが, シュブルツハイムの講義に参加して転向した。13人兄弟の内, 弟のアンドリュー(Andrew Combe, 1797-1847)はベルギーのレオポルド1世(Léopold 1er, 1790-1865)やヴィクトリア女王の侍医も務めた医者で, 骨相学や家政論・教育学でも業績を残している。熱心なオーウェン主義者だった兄のエイブラム(Abram Combe, 1775-1827)は, スコットランド中部オービストン(Orbiston)でオーウェン主義コミュニティを運営した。

<sup>21</sup> 『人間構成論』は初版以降幾度となく版を重ね, 1893年までにイギリスでの発行部数が12万5000部, 英米を中心に今日まで西洋各地の, 実に100以上の出版者によって出版されている。残念ながら, 日本語訳はこれまでなされていない。値段や発行部数などの詳細に関しては, John van Wyhe, *Phrenology and the origins of Victorian scientific naturalism*, Aldershot: Ashgate, 2004, pp.127-164; “Appendix C,” pp.217-228を参照。

<sup>22</sup> George Combe, *The constitution of man*, Edinburgh: John Anderson, 1828, p.293

<sup>23</sup> 教育のない子供を「狂犬ないし野獣」と見なしていたクームは, 1830年にウィルダースピンを誘って, エディンバラに幼児学校(infant school)を設立した(但し, 上の表現は元は「ペイリー(Paley)」の言葉: Jolly, op. cit., p.11)。

<sup>24</sup> ラヴェットは, バークベック・スクール式の学校であるナショナル・ホール・スクール(National Hall School)の設立者。クームの骨相学的人間構成論に影響を受けた教育カリキュラムを実践した。

<sup>25</sup> クームの教育論の詳細については, 前掲先行研究のJolly(前註7), de Giustino(前註8), 小松(前註4), Tomlinson(前註9)を参照。

<sup>26</sup> クームは, 「民衆(People)」を教育するという時, 私たちは主として最も低い階級の人間を考えなければならない」と述べている通り, 労働者階級や勤労階級(industrious class)の教育に力を入

れた ([George Combe], "Secular Education," *Westminster review*, vol.2, Jul., 1853, p.21)。イギリスの人口 1600 万人のうち、1300～1400 万人は勤労階級の人々 [恐らくクームが参照したのは、1831 年実施分の国勢調査である。The penny census of England and Wales, London: Groombridge & Sons, 1854, p.3] だが、労働に生活時間の殆どを割かれる彼らは、本来人間がそうあるべき「道徳的かつ知的動物」ではなく、「器官を持った機械 (organized machine)」になってしまう、とクームは論じている (George Combe, *Lectures on popular education: delivered to the Edinburgh Association for procuring instruction in useful and entertaining science, in April and November, 1833*, 1st American ed., Boston: Marsh, Capen & Lyon, 1834, p.65ff.)。

<sup>27</sup> 「世俗の (secular)」は、ふつう「非宗教の」と言い換え得る概念だが、ここで言われる 19 世紀イギリスの「世俗教育」は、キリスト教教育・聖書教育を含めたものを指すことが多かった。クームの主張した世俗教育も、「この現世において私たちが割り当てられた役割をやり果すための最善の方法で教授するよう計画された教育」であり、非宗教別教育を主張しはしたものの、宗教教育自体を否定するものではなかった (George Combe, *What should secular education embrace?*, 2nd ed., Edinburgh: Maclachlan, Stewart, & co., 1848, "preface")。グラントの分析によると、クームの「世俗教育」とは、今日の言い方では「科学的教育 (scientific education)」と呼ばれるものだったが (A. Cameron Grant, op. cit., p.317)、宗教も含めた「現世」での功利を企図するクームの「セキュラー」の用法は、むしろ語源的に適切であり、これを教育と結びつけて「世俗教育」としたのはクームの功績であったと、ジョリーや WSS 校長のウィリアムズは証言している (Jolly, op. cit., p.257, 718)。因みに、1850 年にイギリスで全国公立学校協会 (National Public School Association) が立ち上がった際、原案では名称に「セキュラー・スクール」が用いられていたが、「セキュラー」の解釈 (宗教を含むか否か) をめぐってメンバー間で意見が割れたため、最終的には「パブリック・スクール」の表現を採用することに落ち着いたという経緯があったという (三好信浩『イギリス公教育の歴史的構造』亜紀書房、1968 年、77 頁)。

<sup>28</sup> 上宮正一郎、前掲論文、29 頁

<sup>29</sup> 例えば、上級生を対象としたウィリアム・エリスによる「社会経済学 (Social Economy)」の授業には、通常 10～14 歳までの生徒が出席したという (岡田与好、前掲書、88 頁)。

<sup>30</sup> 19 世紀イギリスの「教育狂 (Education Madness)」(W. A. C. Stewart and W. P. McCann, *The educational innovators 1750-1880*, London: Macmillan, 1967, pp.275-341) 時代を現出させた中産階級の急進派たちが、実際には保守派同様、階級の保存や、所謂「貧民を貧困へと訓練する (training the poor to poverty)」(C. Birchenough, *History of elementary education in England and Wales from 1800 to the present day*, London: W. B. Clive, 1920, p.10) という目論見の圏内で、教育を構想していたと指摘する先行研究は多い。WSS に関して、D・K・ジョーンズは、「授業料 4 シリングを徴収することによって、クームはエディンバラ世俗学校を「それに値しない貧民」から隔てた」と見ている (Donald K. Jones, "Socialization and social science: Manchester Model Secular School 1854-1861," *Popular education and socialization in the nineteenth century*, ed. by Phillip McCann, London: Methuen & Co Ltd., 1977, p.119)。

参考に、同時代の労働者 (機械工) の家計簿を見ると、週の基本給が 32 シリング、4 人家族の一週間の食費が 15 シリング 1 ペンスとなっており、その内おかみさん学校 (dame school) の授業料 (教育費) が、子供一人につき週 3 ペンス徴収されていた (角山栄・村岡健次・川北稔『産業革命と民衆』生活の世界歴史 10, 河出書房新社、1992 年、258 頁) [※£1=20s.=240d.]。因みに、例えば 1847

年出版の『人間構成論』第 8 版 (pp.507) は 8 シリング、同じく民衆版 (pp.111) は 1 シリング 6 ペンス。また、1850 年代に始まったロンドンブライトン間の鉄道周遊切符は、往復 (およそ 170km) で 3 シリング 6 ペンスだった (John Burnett, *A history of the cost of living*, Penguin Books Ltd., 1969, p.216)。

<sup>31</sup> 職工学院とは、1820 年代以降ブリティッシュ島の各地で設立された、労働者階級を対象とした成人教育機関で、最初ロンドンに設置された (※加藤純治「英国 Mechanics' Institute 運動の歴史像(1) — トーマス・ケリーの所説を中心にして」『名古屋大学教育学部紀要—教育学科』第 24 巻、1977 年、90 頁に、先行研究から引用された 1851 年当時のブリティッシュ島における職工学院の所在地を示した地図が掲載されている)。幼少期に教育を受けられなかった成人労働者を対象に、数学や化学、工学、音楽や語学などの講座が開講されていたが、その科目にしばしば「骨相学」が入っていた事実が興味深い。各地の職工学院では、各校舎を廻りながら講義をする巡回講師などが、ガルヴァニズムや骨相学を教えていた。彼らは、それでかなりよい収入を得ていたという (マイケル・D・ステューブンス『イギリス成人教育の展開』(渡邊洋子訳) 明石書店、2000 年、43 頁)。骨相学と職工学院の結びつきはそのような通常授業だけでなく、例えばマンチェスター職工学院では、1844 年から 45 年にかけての 4 ヶ月間に、公開イベントとして骨相学博覧会を開催したし、図書館 (当時、9 割の学院が備えていた) では骨相学雑誌を定期購読していた

(Mabel Tylecote, *The mechanics' institutes of Lancashire and Yorkshire*, Manchester University Press, 1957, p.153ff., 301)。

<sup>32</sup> ウィリアムズは、大衆教育の新しいアイデアとして、1856 年に「1 ペニー講義堂 (Institute Penny Lectures)」を開いた。民衆が大挙して押しかけ、開門と同時に最前列を工場年少労働者たちが占拠するという盛況ぶりだったという。このアイデアは、後に 1 ペニー教室や 1 ペニー朗読会などへと発展した ("Sketch of William Mattieu Williams," *The popular science monthly*, vol.45, no.33, 1894, pp.548-552)。

<sup>33</sup> ウィリアムズは 69 歳の時に、生涯をかけた『骨相学弁護 (A vindication of phrenology)』を発表している。因みに、ホレーヌ・マンと同じく、彼は息子を「ジョージ・クーム・ウィリアムズ (George Combe Williams)」と名付けている (ibid., p.551)。

<sup>34</sup> WSS の「英語」科目については、次の 2 つの対照が考え得るが、今回は解決することができなかった。即ち、①「標準語」と「方言」という問題と、②現代語と古典語という問題である。クームは、①②のどちらについても問題意識を明示している。

① クーム自身、子供の頃からエディンバラ訛りのスコットランド英語 (Edinburgh Scotch) を話し、「標準語」を聴く機会は稀だったというし (Charles Gibbon, op. cit., vol.1, pp.54-68)、また別の論文では、教育改革の必要性を示す例として、スコットランド高地地方に住むゲール語 (Gaelic) 話者の子供たちの英語教育を取り上げている ([George Combe], "Secular Education," p.7)。

② クームはその著『民衆教育講義 (Lectures on popular education)』(3rd corrected and enlarged, Edinburgh: Maclachlan, Stewart, & co., 1848, pp.10-23) で、「10 人中 9 人の勤労階級の生徒にとって、ギリシャラテン語よりも英語の語学教師のほうがずっと有用 (useful) だろう」と述べ、「英語」教育の重要性の主張に頁を割いている。

<sup>35</sup> モニトリアル・システムは、いわゆるペルーランカスター式として知られる教授スタイルである (安川哲夫「"School for All" の成立過程について (上)」『金沢大学教育学部紀要 教育科学編』第 29 号、1981 年、91-110 頁、及び、同、(下)、第 32 号、1983 年、133-154 頁、並びに、小松佳代子『社会統治と教育—ベンサム教育思想』流通経済大学出版会、2006 年、107-121 頁を参照)。クームは自分たちの方法が、英国内外学校協会 (British and Foreign School Society) が当時推奨していたものと類似していることを認めている。

36 イギリスの民衆教育の形態の一つである慈善学校 (charity school) での問答例は、佐伯正一『民衆教育の発展』(高陵社書店、1970年、例えば42頁など)で見ることができる。いわゆる教則問答書様である。

37 クームも、ハイ・スクール時代の自身の経験から、体罰に反対だった (Charles Gibbon, op. cit., vol.1, p.17)。

38 1851年の第二年次報告書出版時には、「今や体罰は、学校の規律訓練 (discipline) から完全に排除されている [原文イタリック]」と宣言された (Jolly, op. cit., p.680)。

39 元はマルクス (Karl Marx, 1818-1883) の表現 (カール・マルクス『資本論 第1巻』下巻 (今村仁司・三島憲一・鈴木直訳) マルクス・コレクションV, 筑摩書房, 2005年, 503頁)。機械によって財産と技能を奪われ、生産手段も旧来の道具も持たない労働者のこと (J・クチンスキー『労働者階級の成立』(良知力訳) 平凡社, 1970年, 20頁)。また、クチンスキー (Jürgen Kuczynski, 1904-1997) は、「驚くべきことは、近代プロレタリアートが主として婦人と子供からなっているかのような印象を受けること」(76頁)と述べたが、民衆 (people) と言えば労働者階級の人々を指すとしたクームは、当時この事態を嘆じて、「不幸な偶然の一致だが、現代の機械の多くは子供たちにも操作できてしまうのである」と述べている (G. Combe, *Lectures on popular education*, 1834, p.4)。

40 イギリス研究ではないが、ルイ・シュヴァリエ『労働階級と危険な階級—19世紀前半のパリ』(喜安朗・木下賢一・相良匡俊訳) みすず書房, 1993年を参照。そのほかにも、当時労働者は道徳的退廃のイメージから「退化 (degeneration)」と結びつけられて語られたりした (例えば, Daniel Pick, *Faces of degeneration*, Cambridge University Press, 1989など参照)。

41 新村洋史は、17世紀ロックの労働学校論を、イギリスにおける下層階級教育論議の直接の思想的・制度的源流と見ている (新村洋史「ジョン・ロックの救貧法改革案と労働学校に関する一考察」『中京女子大学研究紀要』第39号, 2005年, 13-22頁)。また、上野耕三郎が「[イギリスの19世紀] 30, 40年代は統計が教育を構成した時代」とし、特に「道徳統計 (moral statistics)」が重視されたと指摘していることも見逃せない (上野耕三郎「道徳統計を介した教育の問題構成—イギリスの1830, 40年代の統計運動の一側面」『人文研究』113号, 2007年, 1-24頁)。

42 バークベック・スクールにおけるエリスの「社会経済学」もまた、「経済諸法則を倫理化」した「修身科としての経済学」という意図で開講されていたという (岡田与好, 前掲書の第4章「ウィリアム・エリス・スクール」71-95頁, 及び補論「修身科としての経済学」96-113頁を参照)。

43 『骨相学の統計』(1836)にも、クームの講義は骨相学のものよりも、「道徳哲学の講義はさらに人気があった」と述べられている。例えば、1836年のグラスゴーでの講義の際は、部屋の収容限界である500人を超える聴衆が集まったという (Hewett C. Watson, *Statistics of phrenology: being a sketch of the progress and present state of that science in the British Islands*, London: Longman, 1836, p.231)。

44 18世紀フランスの「道徳科学 (sciences morales)」の「道徳 (moeurs)」には、「自然」や「先天的な能力」の含意があり、それゆえ「道徳科学」は非常に総合的な「人間の科学」を意味するものとなっており、その意味で「人間科学 (sciences de l'homme)」ともほぼ代替可能であると言われる (隠岐さや香「第3章 数学と社会改革のユートピア—ビュフォンの道徳算術からコンドルセの社会数学まで」『科学思想史』(金森修編) 勁草書房, 2010年, 132頁)。骨相学を、こちらの文脈で読解することも、妥当であろう。

45 この点に関しては、ヴィクトリア時代のイギリスにおける骨相学の自然主義の影響の大きさを検討した、ヴァン・ワイの研究 (van

Wyhe, op. cit.) を参照。

46 クームは自然神学についても講じている。その教義の実り多きことを示すために、神意に適う自然の学である骨相学と、十戒の内容を対照して示した (George Combe, *Lectures on moral philosophy: delivered before the "Edinburgh Philosophical Society," and reported for the "Edinburgh Chronicle"*, Boston: Marsh, Capen & Lyon, 1836, pp.172-176)。

47 トムリンソンは、クーム教育論の土台を為す彼の自然神学的キリスト教を、「クームイズム (Combeism)」と表現している (Stephen Tomlinson, op. cit., p.322ff.)。

48 胸像を前に、手に持った頭蓋骨を指差す骨相学者 (G・クームか) のシルエット。後ろに見える顔たちも胸像である。クーム『骨相学講義』(1839)の口絵より (George Combe, *Lectures on phrenology*, New York: Samuel Colman, 1839)。

49 シュプリツハイム説に基づいて、35個の能力が頭部に区画された胸像。このような像や骨相マップが、視覚的インパクトをもって流布した。写真の像は、骨相学を修めたイギリスのJ・デ・ヴィル (James De Ville, 1777-1846) によって、1821年に制作された。ロンドン科学博物館蔵。(< <http://images.wellcome.ac.uk/>>, 2011年9月28日アクセス可能)

50 例えば「健康が基礎」と考えるシュプリツハイムも、「子供時代においては、植物的機能 [消化, 呼吸ほか, 生長・成長のための能力] の調整こそ、教育で最も重要な点である」と述べて、「それにも関わらず、多くの親は子供たちの身体を犠牲にして、心を耕すのに熱心だ」と歎息を洩している (J. G. Spurzheim, *Education: its elementary principles, founded on the nature of man*, 12th American edition, New York: Fowlers and Wells, 1854, p.80)。

51 身体のトレーニングは、例えばクームの重要な先駆者の一人であるロバート・オーウェン (Robert Owen, 1771-1858) でも重視された。これ (身体, 健康, 衛生 etc.) もまた、当時の教育思想を構成し規定する、概念群の一つということが言えるだろう。

52 陪審制を採る裁判は、陪審員による事実審理・認定と裁判官による法的評価 (量刑) の二段階から構成される。今回、生徒が関わっているのは、一段目の事実審 (トライアル) である。

53 小松佳代子, 前掲論文 (前註4) を参照。

54 宗教や道徳に関する部分を取り上げられたのは、当時の社会的文脈 (前述) に加え、「私たちの世俗学校は宗教教育を行っているぞ」という、記事を通じた対外的アピールが意図されていたのかも知れない。記事の最後には、「他の能力についても、適当な効用と誤った効用を問う問題などが出題された」(p.18)ともある。

55 『報告書』には、「脳」の生理に関連した直接的記述はあまりないが、脳への血流 (量) と器官の働きの関連などは、骨相学の教育論書でしばしば論じられていた (例えば, J. G. Spurzheim, *Education*, p.13; Nelson Sizer, *How to teach according to temperament and mental development: or phrenology in the schoolroom and the family*, New York: S. B. Wells & Company, 1877, p.52 など)。

56 先行研究では、特にガル学説の特徴として指摘されている。例えば, van Wyhe, op. cit.; Jason Y. Hall, "Gall's phrenology: a romantic psychology," *Studies in Romanticism*, vol.16, no.3, 1977, pp.305-317; ジェリー・A・フォード『精神のモジュール形式—人工知能と心の哲学』(伊藤笏康・信原幸弘訳) 産業図書, 1985年など。

57 人間本性に基づく個別性の理論というこの側面こそ、骨相学が下層階級からロイヤルファミリーまで広範な流行を見た、主因の一つではなかっただろうか。ドイツの政治家・法曹のG・ストルーフェ (Gustav Struve, 1805-1870) が、骨相学の理論である人間本性=人間精神の共通性を根拠に、「万人が同じ地位と処遇を受ける権利がある」と主張して政治運動を行ったというのは (ラッセル・ショー

ト『デカルトの骨』(松田和也訳) 青土社, 2010年, 256頁), これを逆の面から捉えた事例に他ならない。

<sup>58</sup> J. G. Spurzheim, *Education*, p.167 :

この他にも、学校教育へ骨相学を応用することを唱道したN・サイザー (1812-1897) は、教師が最初に思案せねばならないのは、「体質や〔心身の〕構成的特徴に従って生徒を選別し、分類すること」であると主張している (Nelson Sizer, *op. cit.*, p.11)。

<sup>59</sup> 小松佳代子, 前掲論文, 79-80頁

<sup>60</sup> 同上, 74頁

<sup>61</sup> G. Spurzheim, *Observations sur la phraenologie, ou la connaissance de l'homme moral et intellectuel*, Paris: Treuttel et Würtz, 1818, p.340 :

但し、用語の厳密な哲学的差異かまたはレトリック上の狙いの違いからか、別の著書『骨相学概論』では、「能力それ自身は、善い (good) とか悪い (bad) とか言うことのできないものであることは明らかだ。このような表現は、ただその機能 (functions) にのみ適用される」と述べている (G. Spurzheim, *Outlines of phrenology: being also a manual of reference for the marked busts*, London: Treuttel, Würtz, and Richter, 1829, p.86)。

<sup>62</sup> J. G. Spurzheim, *The physiognomical system*, p.465

<sup>63</sup> 近年の教育学研究においても、「能力」が関心を集めている。例えば、松下佳代編著『〈新しい能力〉は教育を変えるか』ミネルヴァ書房, 2010年; 科研「教育における「力」の概念に関する学際的研究」(研究課題番号: 20330159), 今井康雄 (代表者), 2008-2010年; 白水浩信「教育・福祉・統治性—能力言説から養生へ」『教育学研究』日本教育学会, 第78巻, 第2号, 2011年, 50-61頁など。